

いの流水俳壇

友草 水月選

「当季雑詠」

すれ違ひ又すれ違ふ赤とんぼ

岡本とも子

(評)秋を代表する赤とんぼ数10匹が右から左から交錯するように乱舞する光景、とんぼの習性を良く捉えた句である。特にすれ違ひ又すれ違ふと重ねた表現がすばらしい。作者の感性はいつも鋭く高句が多い。昨今群れて飛ぶとんぼが少なくなつた。農薬が温暖化のためか残念である。

○整然と乱れ田毎の秋あかね

原 玲子

ふと見ればどこか母似の案山子かな

小野川町子

(評)田んぼに立つている案山子を見つけた。ふと見ると母に似ている。顔、それとも立姿、格好、何となくことは言えないが似ているのである。年を取っても母の顔や姿を思い出し忘れることはない。かつては案山子は田舎の風物詩であつたが、今は殆どその姿を消した。

○立ててすぐ案山子田夫の貌なせり

清水 衣子

行く秋や妻にしたがう何やかや

松尾満津夫

(評)何もかも妻の言うとおりにする。思いが違つても言えない言わない婦唱夫随である。夫婦となつて50年60年となると女性には強くなりテコでも動かない。今さら我を張つてももう遅い。弱みは全部握られているのであるが、夫婦円満、家庭円満の骨でもあり、夫たるものの器量である。さて皆さん

はどう思われますか?

○行く秋の鐘つき料を取りに来る

正岡 子規

介護してされて夫婦の秋深む

竹崎たかひろ

(評)元氣だつた夫婦も高齢となり、心身共にいろいろの故障が出てくる。日本ではやがて四人に一人が高齢者となる。入院や介護施設に入所する独居老人も増加している。幸い夫婦が揃い家庭で妻が夫を、夫が妻をとお互いにいたわりながら世話ができる生活は最高である。現在日本高齢化社会の縮図でもある。

○秋深き隣は何をする人ぞ

松尾 芭蕉

二句抄

生も死も神の手の中曼珠沙華
空蟬となりて地蔵に縋りをり

間 浩太

栗拾ひ田舎育ちの手際良き

岡村 嘉夫

時合わせ燃えて消えし曼珠沙華

大川 節弥

秋桜色無き風の子守唄

片岡 包女

水脈引きて名月光を崩しけり
秋蝶のもつる狭庭の立ち話

森岡 照月

人逝きて人を泣かしむるほととぎす
御詠歌に平和を託す秋遍路

津田 久美

老いの身の背丈を比べ秋ざくら
願ひ事云えぬ一瞬流れ星

濱田美智子

路地曲る砥ぎ屋の車秋暑し
大根蒔く自分流だと夫に云ふ

井上 郁子

昭和史の露と消えまじ文字幾多
萩刈るや思わぬ重さ長さかな

川村 博子

十月や赤が好きとや旅靴
秋風やどうにもならぬ消費税

稲の秋無情の雨の叩く音

秋あかね棚田の空の青さかな

竹崎 光子

稲架掛けを阿吽に小田の老夫婦
さゆらぎは命の吐息吾亦紅

伊藤 萩甫

消しゴムの使えぬ汚点天高し

山勢憲一郎

手土産のごろんと重き梨ころぶ

松尾満津夫

白雪の富士連山を睥睨す

竹崎たかひろ

初恋のページを捲る銀木犀

岡本とも子

コスモスの花の数だけ風が吹く

小野川町子

壮快に目覚める今朝の秋となる

友草 水月

息をつぎ昇る急坂こぼれ萩

読み返す吉のお神籤秋高し

名句鑑賞

水月

荒海や佐渡に横たう天の河

松尾 芭蕉

「奥の細道」の旅の途中、元禄2年(1689)7月4日の夜出雲崎直江津の句座で発表された句といわれる。単なる写生句ではない。日本海の荒海の向こうに佐渡島が見え、夜の天空には本土より島まで天の河が横たわっている。天と地と人の壮大な句である。天は天の河、地は荒海、人は佐渡である。佐渡は遠流の島日本の歴史、人の営みを背負っている。芭蕉が日本海、佐渡を望む地で荒海やと詠嘆した時、彼の胸中を去来するのは、親鸞や貴人達、金山で酷使される流人達への思いがあつたであらう。

天の河が切なく美しいのはその人達の頭上にも輝く天の河だからである。

芭蕉の視線は、荒海、佐渡、天の河と自然空間の視野が大きく、時空を越えた雄渾な詠いつぶりは没後三百年を経た今でも色褪せることはない芭蕉の句の中でも一級作品といわれている。

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

〒893-1201 いの町3597

有料広告

医療法人
光生会

森 木 病 院

院長 森 木 光 司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内 科
外 科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析